最優秀賞

世界史の壁

東京都　片岡 雅子

「世界史の壁」―これは私が毎年高校の文化祭でやってきた催しのタイトル名だ。五年前退職した私は都立高校で三十七年世界史を教えてきた。夏休みに生徒に宿題を出す。世界史に関することをＢ４一枚の紙に新聞形式にまとめて提出、それを二学期の文化祭で廊下の壁面に貼り出す。一学年二百名から三百名の生徒の世界史新聞が壁にずらりと並ぶので名付けて「世界史の壁」。片岡賞、優秀賞、ユニーク賞、視覚賞、インタビュー賞、私が選んだ作品に張り紙をつけて文化祭当日に発表する。これを三十数年続けてやってきた。

最後に勤めた高校は農業高校だった。授業を始めようとする私に向かって生徒が「ああ苦痛だあ」と言う。「何で？ただ座って授業を聞いているだけなんだから何が苦痛なのよ？」「俺、その座って授業を聞くっていうのが超苦痛。外で土いじって作業するのは平気だけど。ああ苦痛苦痛！」丁々発止、生徒とやり取りをして授業が始まる。五つの高校で勤務したが、全員が大学に進む進学校もあれば、就職もしくはフリーターで自分の夢を探す生徒の多い職業高校にも勤めた。

農業高校は農業科と家政科がある。どちらも実習を中心に行い、生徒たちもそちらに重点を置くので世界史は必修だから仕方なく受けるといった感じだ。午後の授業だと実習の疲れからか、あちこちで睡魔と闘っている。そういう生徒達が文化祭発表に耐えうる新聞作品を作れるかどうか、正直不安だった。

夏休み明けの提出日、驚いた。そして反省した。

『缶詰新聞』。缶詰があのナポレオンの懸賞に応えて作られた。『神様の食べ物ココア』。『悪魔の植物トマト』。今まで経験した高校とは違った農業科、食物科ならではの作品が数々並んだ。「出来ないのでは？」と壁を作っていたのは私自身だった。生徒達はいとも軽々「壁」を乗り越え、楽しくユニークな新聞が壁一面を飾ったのだった。

（審査評）　高校で世界史を教える作者は、夏休みに「世界史の壁」という課題を出して来た。最後の勤務となった農業高校では、生徒たちがうまくその課題をこなせるか心配だった。けれど、作者の心配をよそに、農業にちなんだ「ナポレオンの缶詰」や「神様の食べ物ココア」、「悪魔の植物トマト」など予想もしなかった秀作が並んだ。立派に出来上がった「世界史の壁」新聞を前に、生徒たちと先生の楽しそうな笑顔が見えるような秀作である。

佐藤典司